

サハチの海

中川陽介

1

珊瑚に囲まれた穏やかな内海に、小舟が浮いている。すぐ近くに少年がひとり。

海底の白砂に、小舟と少年の影がくっきりと映っている。日差しが強い。夏なのだ。

少年は大きく息を吸い込むと、頭を下にして、水中に潜った。岩と岩の間に魚とりの網が仕掛けてある。少年は端から網を外してゆく。ずいぶん

長い時間、少年は水中に居続けた。ようやく少年の足が、水底の岩を蹴った。「ひゅー」

少年が水面に顔を出し、強く息を吐いた。波紋が広がり、小舟がゆらりと揺れる。

抱えていた網を小舟へと押し上げ、自らも小舟に乗り込む。両手に力を入れて残りの網をたぐり寄せる。小舟が大きく揺れる。重い。魚がたくさなかかっているのだ。ようやく網を上げきると、息が落ち着くのを待って、少年は小舟を浜へと向けた。

「大漁だな、サハチ」

少年が小舟を浜に引き上げていると、通りかかった漁師が声をかけた。

「潮がよかったんだ」

サハチ、と呼ばれた少年がはにかんだ笑みを浮かべた。

漁師は笑顔で頷くと、浜の奥にある漁師小屋へと向かった。

琉球の国、中山王察度(さつと)の御代三十七年(明の洪武(こうぶ)十九年、西暦一三八六年)。

十三歳となったサハチは、八月十日のこの日、元服の儀式に臨むはずだった。

日の出とともに、神人(かみんちゅ)と一緒に佐敷村の裏山に登り、東の海にかぶ久高の神に、元服を報告する。そのあとも村内の浜や井戸、墓所にある拝所をいくつも回り、たつぷり半日かけて祈りを捧げる決まりになっていた。

しかし、サハチは暗いうちから海に出てしまった。堅苦しいことが大嫌いなのだ。魚は捕れたが、父はものすごく腹をたてているに違いない。サハチは憂鬱だった。だからといって、いつまでも浜にいては魚が腐ってしまう。獲物を入れた籠を担ぐと、サハチは重い足どりで家路についた。

家に帰ると、案の定、父の思詔(ししよう)が頭から湯気を出して怒っ

ていた。

「お前は今日という日の意味が分かつとるのか？」

思詔は小言を言いつつも、午後の予定に間に合わすために、大急ぎで支度を始めた。

「お前も新しくしなさい」母親に促されて、サハチも着替え、頭にはニーサーガーキ(はちまき)を巻いた。

用意のできた思詔は、サハチを連れて家を出た。佐敷の村は、小道の奥まで真っ白な海砂がしかれ、いつも美しく掃き清められている。白砂の道を、思詔が足早に歩く。サハチは遅れまいと小走りになる。

「父よ。せつかくの新しい着物が汗になる」

サハチの文句に、思詔は聞く耳を持たない。

サハチの父、思詔は佐敷村に住む商人で、なかなかの分限者であった。商う品物は、サメの皮、夜光貝、ウミガメの甲羅など。いずれも船で大和

に運ばれ、刀のつかや馬具、鎧などの装飾に使われる。

海産物は、村の衆が穫つてくる。一年を通して温かな琉球の海では、糸を垂れば魚やサメが、岩場に潜れば夜光貝が、刺し網ではウミガメが面白いように捕れる。思詔は村の衆が持ち込むこれらの海産物を引き取り、十日ごとに清算して、イモや穀物、鋳物などを渡す。銭で支払うこともできたが、村人は、物との交換を望んだ。

思詔のもとに集まった海産物は、大和の佐敷一族が一括して買いあげる。そもそも琉球南部、馬天みなどに面したこの土地が「佐敷」と呼ばれるのは、ここに佐敷氏の商売小屋があるからだ。

このころ、大和の国は、後龜山（ごかめやま）天皇率いる天朝方と、足利義満率いる武家方とに別れ、各地で戦（いくさ）を繰り返していた。肥後の小豪族、佐敷氏は、天朝方の武将名和（なわ）氏に属していた。

名和氏は、後龜山天皇の祖父で、かつて壱岐（いき）に配流されていた、後醍醐（ごだいご）天皇の再挙兵を助けた忠臣で、九州では同じ天朝方の

菊池（きくち）氏とともに、威勢をふるっていた。

名和氏はもともと海運を生業（なりわい）として勢力を蓄えて来た職業集団だ。配下の佐敷氏も、地元八代（やつしろ）の海を拠点にし、海運、操船に長けている。佐敷氏は黒潮の流れと季節ごとの風を操り、頻繁に琉球に船を出した。大和で珍重される海産物を買付けるためだ。

それらの物資は都に運ばれて換金され、天朝方の貴重な軍資金になっていた。

サハチと思詔が歩く道は、やがて上り坂になった。石畳の両側に、大きな樹々が枝を伸ばし、その下でクワズイモが折り重なるように葉を茂らせている。頭上の葉のおかげで日差しは和らいだが、湿気はいつそう強くなった。

「父よ」息の切れたサハチが声をかけるが、思詔は黙って歩き続ける。

思詔は琉球佐敷村の生まれだが、思詔の父、鮫川（さめかわ）大主（うふぬし）はよそ者だった。生まれ故郷でよくない事があり、新しい住処（すみか）を探して歩いた。ここ佐敷を新しい住処と決めたのは、商売相手の大和人（やまとんちゅ）が居住していたからだ。

鮫川大主は、得意の大和言葉を駆使し、肥後佐敷氏と良好な関係を結ぶ。十年後。鮫川大主は大いに財を成し、屋敷も新しくした。さらに十年後、鮫川大主は家業と財産、佐敷按司という地位を息子に与えて、静かにこの世を去っていた。

按司（あじ）というのは、実力で成り上がった領主のことをさす。佐敷按司は、佐敷村の長であり、二百ほどの村人をまとめていた。

ずいぶんと長い間、山道を歩き続けたあとで、前を歩く思詔が立ち止まった。サハチが顔を上げると、それまで木立によって遮られていた視界が急に開けた。そこに、何重もの石垣を張り巡らせた、巨大な城があった。

「大きい」

サハチは目を見開いて城を見つめている。

「島添大里（しましいおおさと）城だ」

「これだけの石、下から運んだのか？」

「大里の衆はみな難儀したと聞いている。馬が何十頭も潰れたと」

思詔はサハチの息が整うのを待って、城の方へと歩き出した。

石垣のなかほど、そこだけが木造の門の左右に、短い刀を腰に差した門番が立っている。思詔が近づき来意を告げると、門番は頷き、二人のために城門を開けた。勝手を知っているようで、思詔はサハチを連れて郭（くるわ）の中へと歩いていった。

内郭（ないかく）は、広い庭になっている。いざという時には、数百の兵も入れられそうだ。大きな倉が三つあり、倉の前には穀物や海産物などが積み上げられている。

庭の奥にはさらに石垣で囲まれた一角があり、ここにも兵が立っていて、小さな門を守っている。

思詔は再度、身分と来意を告げ、城の最も奥まった場所へと入った。

門をくぐると、大きな茅葺き屋根をいただいた立派な建物が建っている。思詔とサハチは、玄関先で衣服についた埃をはらい、足をすすいで中へ入った。

「サハチよ。妙なことは言うでないぞ」

廊下を歩きながら思詔が小声でささやく。

「なんですか？ 妙なことって」

「とにかく、黙っとれ」

ふたりが通された部屋は、南と北の壁が取り払われ、東西の壁と柱だけが屋根を支えている。部屋自体が、城の中で最も高いところにあるので、居ながらにして、浦添、中城、遠く勝連までが見渡せた。

「佐敷按司どの」

サハチが声がした方に目を凝らすと、部屋の奥、日差しの届かぬ暗がりの中に、やせた男がひとり座っていた。

「よく来たな」

男が低い声で思詔に声をかける。

「ご無沙汰、申し訳もございません。大里按司どの」

思詔が深々と頭を下げる。慌ててサハチも頭を下げた。

「大和からの品々、確かに受け取った。次の船に乗せて明国へ運ぶつもりだ。あれだけの上物、明王は、お返しに、きつとすばらしい品々を下賜（かし）下さるだろう」

「どうぞよろしく、お願いいたします」

大里按司、汪英紫（おうえいじ）は、刀剣、兜（かぶと）、馬具といった大和の品々を明に輸出し、代わりに陶磁器、鉄器などを輸入している。汪英紫にとって、思詔が持ち込む大和の品々は、大事な商売道具であり、それゆえ、たかだか佐敷村を差配するだけの小按司に対しても、殷勤な態度で接することを忘れない。

「いい風が吹けばいいがな」

汪英紫が遠く勝連沖に視線をやった。鼻が高く、顎が鋭角に尖っている。深く落ち込んだ眼窩の奥で、細い眼が光っている。

「今年はずまず、と聞いております。按司殿の宝物を乗せた船は、きつと無事に帰ってきますでしょう」

思詔は言つて軽く会釈した。

春から夏にかけて、明への船はもっぱら島の東海岸にある港から出る。汪英紫の宝を乗せた南山王の朝貢船（ちようこうせん）も、この時期、佐敷の港から明に向かう。秋になり北東の季節風が強まると、船の出入りは島の西海岸、那覇や豊見城からとなる。

この時代からさかのぼること十四年。

琉球中山王察度の御代二三年（明の洪武五年、西暦一三七二年）。モンゴル王朝の元を倒し、漢民族国家、明を建てた洪武（こうぶ）帝は、周辺の国々に朝貢（ちようこう）を促（うなが）し、その使者は琉球にもやってきた。

このころ、琉球国には三人の王がいた。今帰仁に北山王怕尼芝（はにじ）、島尻大里の南山王承察度（しょうさつと）、そして浦添の中山王察度（さつと）だ。

いち早くこの呼びかけに応えたのは、中山王であった。察度は、多くの貢ぎ物とともに王弟泰期（たいき）を明に派遣した。

即位間もない洪武帝は察度の早々の入貢（にゆうこう）を喜び、貢ぎ物に倍する宝物を下賜し、その後も優先的に琉球国の朝貢を許し続けることになる。

朝貢貿易は、貢（こう）する側に莫大な富をもたらす。毎回、貢（みつ）ぎ物の何倍もの価値の宝物を、明国皇帝から賜るからだ。しかも、朝貢は王の独占権益であり、下賜された宝物を売買して出た儲けは、王が独り占めできる。

それまで各按司の利害調整役ぐらいであった中山王は、朝貢という巨大な役得を得、次第に富と権力を蓄積させてゆく。

南山、北山の各王が、中山王の成功を見逃すはずも無く、ともに明の皇帝に朝貢を願ひ出、許される。以降、南山、北山ともに王が富を独占。王権は強化され、三人の王の居城、今帰仁、浦添、島尻大里の各城（ぐすく）と、その城下町は急速に整備されてゆく。

百姓をしばり上げるぐらしか収入の当てのない各地の按司たちは、こつ然と現れた三人の強力な権力者に抗う（あらがう）術も無く、いつしか明確な上下関係が、王と各按司との間に生まれていた。

そのなかで、ひとりだけ例外の按司がいた。島添大里按司（しましいおおざとあじ）、汪英紫だ。

初め、汪英紫は自分の甥にあたる南山王の船に、貢ぎ物を乗せてもらっていた。やがて南山王の叔父（おじ）、という肩書きで朝貢を願ひ出て、洪武帝二四年、これを認められてしまう。

王の叔父という身分で明国皇帝に朝貢したのは、後にも先にも汪英紫だけだ。さらに後年、汪英紫は自身の息子たちを王や有力按司に配すること

で、南山王朝をも支配することになる。

小さなグスクが乱立し、抗争の絶えない南山において、汪英紫は時代の梟雄（きょうゆう）であり、朝貢貿易を押しえた者のみが覇者になりえる、という事実を見抜いた先進的な人物ともいえた。

「そこにいるのは息子どのか。いくつになられた？」

暗闇の中で、汪英紫が目を細める。

「今年で十三。ようやく大人の仲間入りでございます」

「元服か。それはめでたい。名はなんと？」

思詔がサハチを見た。サハチは直答すべきだろうと考え「サハチでございます」と頭を下げた。

「サハチ。そうか。やがては思詔どののあとを継いで佐敷按司となるのである。それまでは、よく父上の仕置きを見ておくのだぞ」

「はい」

サハチは笑顔で答えた。

屋根のひさしが大きく庭に張り出して、部屋の中の日差しは柔らかい。風が通り抜け、涼しく快適であった。

「元服か。なにか祝いの品をとらせよう。なにがいいかな？」

汪英紫が片方の頬だけをゆがめた。多分、笑っているのだらうとサハチは思った。

「どうぞ、お気遣い無用に存じます」

頭を下げる思詔の横で、サハチは「この城を下さいます！」と言った。城中のものに聞こえそうな大きな声であった。

「ば、馬鹿者！」

思詔は慌ててサハチの頭を床に着くまで下げさせた。

「なんと言う事を。申し訳ございません」

汪英紫が、真顔でサハチの顔を覗き込む。

「サハチよ。もしかして、毎晩そのような談義を父上とかわしておるのかな？」

「子供の戯れ言でございます。お許しください」

思詔は冷や汗で、着物が背中に張り付くのがわかった。

「わかっておるわ。ワシもその戯れ言につきあつたまでのこと」

汪英紫は思詔親子に興味を失ったのか、不機嫌な表情で奥に声をかけ、唐菓子やサハチに与え、二人を下がらせた。

「なぜあのような事を」

帰り道、思詔がサハチに話しかけた。まずい、とサハチは思った。思詔の声が裏返っている。本気で怒っている証だ。

「今日はお前の元服の日。もう子供の戯れ言では済まんだぞ」

「涼しかったので」

「なに？」

「城ですよ。涼しくて、あそこなら夜もよく眠れそうです」

思詔が立ち止まり、後ろから来るサハチを見た。サハチは固い石を踏ま

ぬよう、下を向いて歩いてる。

「母も言ってるではないですか。佐敷の屋敷は暑くて眠れたものではないと」

思詔は何も言わずに歩き出した。家に着くまで、思詔は無言のままだった。

家に帰り、夕食をとると、思詔はサハチを座らせた。

「昼間のこと、反省しておるか」

「はい」

「では、お前が元服のこの日に、我が一族のことを話しておこう」

元服のごちそうと、唐来ものの酒が入り、思詔の機嫌は持ち直している。サハチは父が再び怒りださぬよう、神妙に頷いて、膝を揃えた。

「我が家はもともと佐敷の住人ではない。このことは、知っておるな」
「はい」

「私の父、そなたの祖父は伊平屋に生まれ、その後、伊是名に渡ると、島の民をまとめる島長（しまおさ）を勤めておった。そのころ、島ではたびたび日照りに悩まされていた。畑の土はひび割れ、イモどころかアワやヒエさえ収穫できない年があった。多くの者が飢えに苦しみ、中には死にいたるもの者もいた。父は、そんな日照りに備えて、倉に食べ物を蓄えておく事を考えた。島人を飢えから救おうと考えたのだ」

サハチは黙って頷く。

「ある年、心配していた日照りが島を襲った。父は倉を開け、食べ物を配った。島の者すべてに、平等に行き渡るように」

「備えが役に立ったのですね」

「しかし、一部の民が騒ぎだした。食料が足りない、鮫川大主の倉を襲えと。鮫川大主というのは、父の名前じゃ」

「おじいさまも鮫の皮を商っていたのですね」

思詔は頷き、話しを続ける。

「とにかく、食料をよこせと、大勢の民が騒ぎだした。こうなると、たとえ島長といえども、押さえることなどできない。父は倉を捨て、命からがら島を逃げ出した」

「話し合いはできなかつたのですか？」

「人が数を頼みに騒ぎ立てるとき、恐ろしい魔物になってしまつたと、父は言っていた。いつも道で出会うと笑顔で挨拶してきた老人が、その時は手に石を持ち、眼が吊り上がり、口が耳まで裂けていたと」

「恐ろしい」

「幼い頃、私はよく言われた。たとえどんなに多くのものに推されても、人の上に立つような役割は引き受けるなと」

「でも、佐敷の按司を引き受けています」

「よそ者がその土地に住み着くには、地元の有力者に受け入れてもらう必要がある。伊是名から、ここ佐敷に移って来た父は、そのころ村を治めていた大城按司（おおしろあじ）に多くの贈り物を贈った。なんとか好意を

持つてもらおうと思つたのだ。大城按司は父を気に入った。そして自分の娘をその妻とした」

「おばあさまですね」

思詔は頷き、話しを続ける。

「私を佐敷按司にしたのも、大城按司だ。しかし、その大城按司も、今はもういない。今日お前が出会つた大里按司が責め殺したのだ。恐ろしい男なのだぞ、あの大里按司というヤツは。なにお前というヤツは……」

怒りの矛先が自分に向きそうなことに気づいたサハチは、慌てて話題を変えた。

「父は佐敷按司で満足なのですか？」

思詔は複雑な表情でサハチを見た。

「お前は、足るを知る、という言葉を知っているか？」

「いえ」

「大昔の唐人の言葉だ。サハチよ。お前はこの村で一生を終わるなど、詰

まらんことと考えているだろう。どこかへ行きたい。もつと何か大きなことをしたいと」

サハチは下を向いた。

「気持ちには分からなくてもない。けどな、この村で按司として生きること、それはそれで立派な勤めだ。なかなかやりがいのある仕事だと、私は思う」
サハチは、何か言いたそうだったが、言葉を飲み込んで立ち上がり、その場を後にした。

寝所に入った思詔に、妻が声をかけた。

「今日のこと、大丈夫でしょうか？」

「大里按司か？ 案ずるな。明日にでも唐の酒を贈っておく」

「サハチは時々ああいう生意気を言うのです。同じ年頃の友達が少なく、いつも大人の中で暮らしているからでしょうか」

サハチの母は、静かな寝息をたてている幼子たちに、クバの葉で編んだ

うちわで風を送っている。この家は子だくさんであった。

「しかし…」

「しかし？」

「しかし、驚いた。あいつ、大里按司を試しおったわ」

「試す？」

「不敬なことを言って、大里按司の器量を試したのだ。笑い飛ばすほどの大ものか、怒りだすような小ものかと」

「まあ、で、どうでしたの？」

「大里按司か？ 小ものだな。子供の戯れ言にもおびえ、不安そうな顔をしておった。それで山の上に、あのような大きな城を作って、隠れ住んでいるのだろうか」

「そうですか」

思詔にとって、汪英紫はいまましい存在であった。思詔が行っている大和との交易は、確かに大きな利益をもたらしてくれる。しかし、もし明

国とも直接商売ができれば、その儲けは今までの比ではない。現実には明国皇帝が認めた者でなければ朝貢は許されず、結局南山王とその叔父、汪英紫だけがますます富栄えるばかりであった。

「しかし、案外、大ものなのかもしれんぞ」

「誰がです？」

「我らの長男どのよ」

思詔はそう言つて目をつぶつた。

どこかで、寝ぼけた蝉が鳴いていた。

2

サハチはその後も何度か大里城に上つた。郭の中には入れないが、城郭の外にも見晴らしのいい高台がある。その日、サハチは高台の木陰に腰を

下ろし、眼下の佐敷村や、沖どまりしている船を眺めていた。

今日、佐敷の家では公事（くじ）が行われている。

村と村との争いや、人を殺めるなどの大罪が起きた時には、島尻大里にある南山城で、南山王が裁きを下す。盗みや怠け、不義などの些細な係争は、佐敷村の按司である思詔が裁くことになっている。

今ごろ思詔は、野菜を盗んだとか、嫁が働かない、といった村内の日常のもめ事を裁くために、しかめっ面をして座敷に座り込んでいるはずだ。

本来なら、サハチもその隣に座り、係争の裁きかたを学ばねばならなかった。按司の仕事を覚えるためだ。しかし、長い時間座敷に座り、人々のどうでもいい愚痴を聞くのは、サハチには絶えられない苦痛であった。

それでサハチは、大里城の高台に逃げて来ているのだ。

眼下の港に大きな船が停泊している。周りに小舟がたくさん群がり、次々に荷物を運び込んでいる。浜で荷物の積み降ろしを差配しているのは、きつと、佐敷氏の家人、秋月兵部（あきづきひょうぶ）だろう。

兵部は一目で大和人と分かる。大きな体と異風な鬚。いつも袴（はかま）をつけ、腰に小刀を差している。

話しかけると分かるが、性格は穏やかで、人懐っこい。絶えず唇の端に笑みを浮かべ、いたずらっぽいやつぽい瞳をしている。

サハチは兵部と話したくなかった。そこで城外の物売りから瓜を買おうと、軽い足取りで港へと向かった。

「瓜はいかがですか？」

サハチは荷物の積み降ろしを見つめる兵部の横に立ち、ふたつに割った瓜を差し出した。

「おお、かたじけない。この暑さには、なによりの馳走」

兵部が瓜にかぶりつく。瑞々しい汁が口いっぱい広がる。

「うむ。よく熟れている」

「この様子では、次の大潮には出航ですね」

「皆の衆、よく働いてくれる。これも思詔殿のおかげよ」

「父は、兵部どののお人柄だと。大和の人はみな気が短くすぐに大声を出す。

しかし、兵部どのには誰にでも穏やかに接してくださいと、と」

「それもこれも、みな思詔殿が教えてくださったのだ」

前を見たまま、兵部が笑顔で頷く。

「一つ尋ねてもいいですか？」

「何かな？」

サハチが小舟から大船に運ばれている品々を指差す。

「あの亀の甲羅は、大和ではどれくらい値となるのです？」

「あれほど大きいものなら、五百文ほどかな」

「では、あのサメの皮は？ あの夜光貝は？」

兵部はいちいち値を教えた。

「なるほど」

サハチはしばらく黙って何かを考え込んでいる。

「何を考えておる？」

兵部がちらりとサハチの顔を見た。

「いや、この舟一隻で、どれくらいの儲けになるかと」

「ほう、どれくらいになる？」

「ざっと見積もって五十貫文」

「これはしたり。そのように儲かるはずも無かろう。航海の諸費用、水夫の労賃、船主の取り分、海賊どもに払う銭もある。こう見えて、なかなか厳しい商売なのだ」

「なるほど。そういうものですか」

サハチは微笑みを浮かべている。

「そういうものだ」

兵部は素知らぬ顔で瓜を頬張っていたが、内心は穏やかではなかった。サハチは一度の航海の儲けを、ほぼ正確に言い当ててみせたのだ。

「そうそう。あとでおぬしの家に寄るよ。思詔殿に呼ばれたんだ。ヤマンシー

が手に入った、と」

「それは珍しい。きつと大変な頼み事ですよ。気をつけて」

サハチは笑顔で兵部に会釈をし、浜を離れた。

――確かに、シシとは按司殿、張り込まれたな。一体なんの用なのだろう？

兵部は警戒しつつも、猪肉の脂の甘みを思い出し、思わずつばを飲み込んだ。

夕方。水浴びを済ませた兵部は、思詔の家を訪ねた。思詔は穏やかな笑顔で兵部を迎えると、部屋の上座に座らせた。すぐに思詔の妻が兵部の杯を酒で満たした。

「これはいい匂いですなあ」

兵部がひくひくと鼻をうごめかせる。

「渡来もので、老酒（らおちゅう）といます」

「ほう」

兵部が口を付ける。

「うむ。うまい」

思詔の妻が、白磁の皿を兵部の前に置く。酒と塩で煮込んだイノシシの肉だ。

「これはこれは」さっそく肉を頬張った兵部が、にんまりと笑う。肉は口の中で溶けてしまうほど柔らかく、たっぷりついた脂が甘い。

「まづまづ」

笑顔の思詔が陶磁器に入った老酒で再び兵部の杯を満たす。

兵部はなみなみとつがれた老酒がこぼれぬように口を杯に近づけ、一気に飲み干し、かちりと杯を膳に置いた。

「酔う前に聞いておきましょう。なにかお話が？」

思詔が目を伏せ、控えめな笑みを見せた。

「実は、息子のことなのです」

「サハチどのか。さつきまで一緒に浜にいましたよ」

「そうですか」

「積み荷ひとつひとつの売値を尋ねられました。おおよその額を教えると、あつという間に船一隻分の儲けをはじき出しました。これが当たらずといえども遠からずで。海賊にも銭を払うとごまかしましたが、いや、冷や汗をかきました」

「それは、失礼なことを」

「それと、別れたあとで気づいたのですが、あのとき、サハチどのは大和言葉で話しておられた。あまりに流暢なので、気づきませんでした」

「そうでしたか」

「息子どの、立派な商売人になりましたなあ」

「しかし佐敷の按司となるとあれでは勤まりません」

「どういうことです？」

「村の按司には、実に多くのつとめがあります。季節の節句には、神人（かみんちゅ）と祈りを捧げ、隣村との水争いの時には先頭に立ちます。村。

衆の祝い事、弔いごとに顔を出し、屋根の葺き替えには音頭をとります。時には盗人（ぬすつと）相手に大立ち回りも演じることもあります」

「それは忙しい」

「サハチは按司の仕事を覚えなければならぬ時機です。今日も大事な公事裁きの日であったのに、朝早く家を抜け出して、どこかに雲隠れする始末」

「なるほど」

「多分、ばかばかしいのでしょう。村の按司のつとめなど。自分はもっと大きなことを成すべき男なのだ、思い込んでいるようです」

「で、私にどうしろと?」

「次の船に、サハチを乗せてもらえませんか?」

「サハチどのを大和へ?」

「井蛙（いせん）、大海を知らず。夏虫、氷を知らず。サハチに大きな世界を見せ、それからもう一度、この村に帰って来てもらいたいです。外の

厳しさに接すれば、きつと今の恵まれた境遇に気づくはずです」

「辛い船旅となりますが」

「望むところです」

頭を下げた思詔に、兵部は

「佐敷の殿の代官として、初めてこの島に来て以来、ずっとお世話になってきた思詔どのの申し出、どうしてお断りすることができましょう。引き受けました」

と深々と頭を下げる。

「かたじけない」

思詔と兵部はともに目の高さまで杯をあげると、ぐつと酒をあげた。

それから数日後。その日は朝から快晴で、穏やかな南風が吹いていた。風待ちをしていた大和の船ががらりと碇をあげる。

「帆を脹れ！」

秋月兵部の指示で、船は慌ただしく出航準備に入る。

船の甲板から、サハチが浜の思詔に何事か叫ぶが、距離がありすぎて聞き取れない。

思詔は黙って頷くと、大きく手を振った。

大和船を沖まで引つ張ってきた手漕ぎの小舟たちが次々に離れてゆく。

帆柱の最上部に名和氏の家紋『帆掛け船』の旗を掲げた大和船は、緑色の珊瑚礁を出て、群青の大海へと滑るように出て行った。

3

佐敷を後にした大和船は、勝連半島の先端をかすめて徐々に琉球本島を離れた。船は南風を帆いっぱいを受け、潮の流れに乗って、飛ぶように奔る。

海はその色を紺碧に変え、大きなうねりが次々に押し寄せる。

サハチは船に酔った。海で育ったサハチにとって、初めての経験だった。何度も吐いて、腹の中に何も無くなっても、まだ吐いた。

「誰よりも先に島影を見つけ、私に教えなさい」

秋月兵部が横になっているサハチに言いつけた。

サハチは海に落ちぬよう四つん這いになって甲板上に作られた小屋の屋根に登り、大海原を見つめた。しばらく水平線を眺めていると、不思議と吐き気が治まっていった。

なおもサハチが水面を見つめていると、海の上に、うつすらと黒い線が見えて来た。黒い線は、すぐに薄い皿を裏返したような形になった。

「島だ！」サハチが叫んだ。

近くにいた水夫たちが笑った。

みな、とっくに見つけていたのだ。

「酔いが治ったでしょう。遠くを見ていると、なぜか酔わないのです」

兵部も笑顔を見せる。

サハチはそれからはいつも水平線を眺めるようにした。確かにそれ以来、船に酔うことはなくなった。

島が見えてから、近づくまではずいぶんと時間がかかり、その日の夜遅く、ようやく船は与論、友利の港に入った。

島に近づいて、サハチははじめて知った。

陸には様々な匂いがある。樹々の匂い、花の匂い、土の匂い。人間たちが煮炊きする生活の匂い。たった一日の航海であったのに、サハチはどの匂いも懐かしく、好ましいものを感じられた。

水夫たちは沖に船を泊めると、魚汁をぶっかけた飯をかつ込み、そのまま寝床に潜り込む。サハチも横になると、陸の匂いを感じながら眠りに落ちていった。

翌朝早くに船は港を出、次の泊まり、沖永良部島を目指す。

サハチは朝から小屋の屋根に登り、水平線を見つめた。

大海原をゆく船は頼りがあるのか、不思議と魚どもが船の周りに集

まってきた。船上に飛び込んでくるトビウオも多く、水夫たちは残らず捕まえ、生で食ってしまう。サハチはその日、船のすぐ近くで潮を吹き、尾びれで海面を叩く勇魚（いさな）を見た。

午後には遙か彼方から雨雲が押し寄せ、船を飲み込んだ。水夫たちは丸裸になると、甲板を叩く雨を全身に浴び、手ぬぐいで体をごしごしとこする。サハチも水夫たちと一緒に雨を浴び、体にまとわりついていた潮と汗をさっぱりと洗い流した。

船倉にいた兵部が裸になって上に出てきた時には、すでに雨は止み、雲間から強い日差しが差し込んでいた。

「やっ！ 出遅れたか！」

兵部がいまいましたげに叫ぶと、みな大笑いをした。

風に恵まれ、船足は順調に伸びる。

静かだ。聞こえるのは、舳先が水を分ける音と、風をはらんだ帆が、帆柱を軋ませる音だけ。

「このぶんだと、夕方には沖永良部です」

兵部が水平線を眺める。すでにうつつすらと島影が見えている。

「兵部どの、船旅はこれで何度め？」

サハチは屋根の上であぐらをかき、船の動きにあわせ体の重心を左右に移動させている。

「さて。多すぎて、覚えてませんなあ」

兵部は帆綱を右手でしっかりとつかんでいる。

「船が気に入りましたか」

兵部の問いに、サハチはこくりと頷いた。

「毎日、何か新しいことがおきます。魚が飛び込んで来たり、勇魚がでたり。

島に入れば、知らない食べ物を見たり、知らない言葉を聞いたり」

「なるほど」

「佐敷では、朝起きると大体のことは分かっています。今日何かあるのか、誰と会うのか、何を食うのか」

兵部はあらためてサハチの顔を見た。太陽がまぶしいのか、軽く眉間にしわを寄せ、遠くを見つめている。島で時おり見せた、神経質そうな表情は消え、穏やかな瞳をしている。

「海のほうが、ずっといい」

サハチはつぶやく。

「しかし、危険も多い。奄美の沖で、それまで北に向かっていた真潮（ましお）が、急に東に向きを変える。そこから先は、少々手強いですぞ」

「荒れるのですか？」

「潮に逆らうことになりますから。もし潮に負けて流されれば、その先には何もない。果てしない大海原です」

「そうですか」

サハチは急に不安そうな表情になった。

「なに、この船の水夫はみな何度もこの海を押し渡って来た強者（つわもの）ぞろい。心配はご無用」

兵部の言葉と、自信に満ちたその態度は、サハチを勇気づけた。

「舵をとってみますか？」

「ぜひ！」

兵部はサハチを連れて甲板上の小屋の中に入ると、それまで舵を握っていた水夫に代わって、サハチに舵を取らせた。

「小舟と違って大きな船の舵は効きが悪い。早め早めに舵を切るように。それと、操舵（そうだ）には相当の力がいらいます。腰を入れ体全体で思い切り切る」

サハチは頷いて舵を握った。船の前方に巨大な入道雲が沸き立っていて、西日に照らされて真っ赤に染まっている。海面で反射した西日は、船の帆もサハチの顔も朱色に染めている。島では、美しく整った顔がサハチを幼く見せていた。船の上では、緊張と興奮のせいで表情が引き締まり、急に大人びてきた。サハチは今、少年が青年に変わる特別な時間を生きている。

サハチは舵取りが気に入り、暗くなってもなかなか舵から手を離さな

かった。

「ごりゃおいが仕事ばい」

老水夫に声をかけられ、しぶしぶサハチは舵から手を離れた。

さらに四日後の夕方、船は奄美の名瀬に入り、食料と水を積み込んだ。買い出しから帰って来た兵部が、小舟から大きな酒たるを抱えて甲板にのぼって来た。

「今夜はみな、思う存分飲め！」

すでに酔っているのか、兵部は機嫌がいい。

サハチのそばを通る時、兵部の体からぷうんと甘い匂いが香った。それが脂粉（しふん）の匂いだとわかるまで、サハチにはさらに数年が必要であった。

翌朝、島を出た船は、島影を右手に見つつ、徐々に奄美から離れていった。そのころから、明らかに潮の向きが変わった。進行方向の左手、北西

の方角から、大きなうねりが次々に襲ってくるようになったのだ。

それまで一人だった舵手（だしゅ）は、左右の舵に一人づつの二人体制になった。順風を満帆に受けつつ、屈強な男が二人そろって、舵を潮の逆に向けることで、船は斜めに大波を切り裂いて、ようやく東上を続ける。

「皆の衆、ここが踏ん張りどころぞ！」

兵部は珍しく厳しい表情を見せる。

水夫たちは総出で、順に舵手を務める。サハチも大きな男たちに混じって舵を取った。

サハチの横で舵を握る老水夫に、兵部が目顔で「どうだ？」と問うた。老水夫はちらりとサハチを見ると、口の形だけで「なかなか」と答えた。兵部は笑顔で頷くと、一人甲板下の船室へと降りていった。

夜を徹しての波との戦いは、翌朝、太陽がずいぶんと高くなってから、ようやく終わった。知らぬ間に、潮が追い波に変わっている。船は真潮から完全に抜け出たのだ。精魂使い果たした水夫たちは、みな甲板で倒れる

ように眠りについた。

サハチは眠りに落ちる前に、ふと舵のある小屋の中を見た。そこにはひとり兵部がいて、涼しい顔で舵を握り、船を走らせていた。

琉球を出て十日目の朝、屋久の島影が水平線の上に見えた。

「ここまでくれば、もう大丈夫。あと二日ほどで肥後の国に入ります」

兵部が無精髭を撫でつつサハチに話しかけた。

「そう言えば、サハチ殿は温泉をご存知か？」

「温泉？」

「さよう。肥後の佐敷では、地面のあちこちから温かな湯がわき出しています。その湯を穴にためて、ぎぶんと身を浸す。これがまさに極楽。ああ、早く熱い湯に浸かってさっぱりしたいもんじゃ」

兵部は水平線を眺めつつ、なおも無精髭をさすっている。

「ふん」

サハチは兵部の温泉ばなしに気のない相づちをうちつつ、近づいてくる屋久の様子を眺めていた。海面より始まる島の稜線は、天に向かってどこまでも盛り上がり、その頂きは、青空に屹立している。山肌には鬱蒼とした森が茂っていて、今までに見たことないほど緑の色が濃い。サハチの胸中に、はじめて異国に来た、という思いが強く募った。

兵部の言葉どおり、それから二日で船は薩摩半島を右手に眺めつつ、天草を越え、佐敷氏の地元、肥後八代湾へと入っていった。

「大きいな、大和は」

どこまでも続く海岸線を眺めつつ、サハチはつぶやいた。

「大和と言っても、ここはその一部、筑紫島（つくしのしま）。この何十倍もの大きさですよ、大和全体は」

「何十倍」

「まあ、大きいだけに、戦乱もあちらこちらで起きていて、よっぽど琉球国のほうが住みやすいですがね」

そう言いつつも、兵部は大和に戻るのがうれしいのだろう。朝からずっと機嫌がいい。

「佐敷は魚もうまいし、米もいい。米がいいから、酒もうまい。ぜひ、サハチどのに味わってもらいたいもんですな」

兵部は船の甲板に立ったまま、ずっと海岸線を眺めている。

「私は温泉に入ってみたい」

兵部の陽気さが移ったのか、サハチの気持ちも弾んでいた。目にする筑紫島の緑の美しさにも心が動く。

「あの岬を超えれば、すぐに佐敷のお城が見えてきます」

兵部が笑顔を見せる。船は岬の突端を右手にかわすと、大きく舵を切って内海へと入ってゆく。

「おおー！」

水夫どもが一斉に声を上げた。

「これは、なんとしたことか！」

兵部は船の舳先（へさき）にまで走り出て陸の様子を凝視している。岬を回ると、船はすでに港に入っていた。港の奥、小高い岡の上に石垣を積んだ山城が見える。しかし、その城は、真つ黒な煙を吐きつつ、激しく炎上しているのだ。

「町も、燃えてるぞー！」

城の下に広がる城下町にも火の手は上がっていて、すでに燃え尽きた場所は、真つ黒な焼け野原となっている。

そこだけが無傷と言える棧橋に、船はゆっくりと横付けした。

もやいをとるのももどかしく、大刀を腰に差した兵部が陸地に降り立つ。水夫たちも我先にと町の中へと駆け出す。この焼け野原のどこかに、彼らの家があり、家族がいるはずなのだ。

最後にサハチが陸地に降り立った。異臭の漂う一面の焦土が、サハチにとって、はじめての大和であった。サハチは兵部とともに佐敷の町を歩きだした。

町の有様は惨憺（さんたん）たるものだった。

家屋は焼けただれ、路地には重なり合うように町人たちの骸（むくろ）が打ち捨てられている。中には幼い我が子を抱えるようにして炎に灼かれた母親の姿もある。熱さから逃げようとしたのか、港の中にも多くの骸が波間に漂っている。

「むづいことを」

兵部がうめく。

入船を見ていたのであろう、城から一人の甲冑武者が兵部のもとに駆け寄って来た。

「秋月どのー！」

「おお、伊東殿。これは島津の仕業か！」

兵部の問いに、武者が頷く。

「戦（いくさ）の始めは、お味方優勢。勝ちに乗じて島津領奥深くまで攻め込みました。しかし、それが敵の策だったのです。背後を伏兵に断たれ、

浮き足立ったところを、賊徒島津に今川、大内、大友の勢までもが加わり激しく責め立てられ、將軍宮（しょうぐんのみや）殿、菊池武朝（きくちたけとも）殿、名和（なわ）顯興（あきおき）殿とも、今や行方知れずの始末」「して、佐敷勢は？」

「主立った家臣は、殿を守って国境まで退く（しりぞく）中で討ち死。殿はお城まで退かれたあと、本丸に火を放ち、自ら腹を召されました。奥方様、お子様方もみな殿のあとを追われ……」

「殿はお亡くなりになったのか」

「町の者どもは、米と酒を用意し、恭順を示したのです。しかし雑兵の奴らは聞く耳を持たず、物は盗むは、火はつけるはで。果ては女子供までも容赦なく……。奴ら、まだ遠くには行っていません。この船の様子も、きつとどこかで見ているはず」

「琉球との交易船と分かれれば襲ってくるに違いない」

今にも丘の向こうに十文字紋の旗が翻（ひるがえ）りそうな気がして、

兵部はぐるりと周囲を見回した。

「すぐに船にお戻り下さい。海上では、島津の水軍に十分にお気をつけ下さい！」

武者は兵部に向かって一礼すると、再びいまだ煙くすぶる佐敷城へと走り去った。

燃え続ける城を見つめていた兵部は「殿は討ち死。お歴々まで行方知れずとなれば、一体わしらはどこへ向かえばいいのだ？」とつぶやいた。

「戻りましょう。琉球へ」

驚いた表情で兵部が振り向く。そこにサハチがいた。サハチは兵部とともに、佐敷の城と町の有様をすべて見ていたのだ。

兵部は小さく頷くと「とりあえず、水夫どもを呼びにいかせます。私人では帆も上げられません」と話し、サハチとともに船に向かって歩き出した。

「今、大和の国は大乱の中にあります。一方は、宮様をいただく我が天朝方、

一方は逆賊足利を旗頭とする幕府方です。あの山の向こうにも、逆賊の島津がいて、このような悪逆無道な振る舞いを働くのです」

歩きながら、兵部は目の前でおきた戦について、サハチに話して聞かせた。

「島津と国境を接する佐敷勢はせいぜい三百。いざという時には名和殿、菊池殿が加勢に駆けつけてくださる手はずであったが……」

兵部の話しを聞きながら、サハチは黙って歩いている。その表情は固く、顔からは血の気が引いている。

しばらくすると、水夫たちがポツリポツリと船に帰って来た。親兄弟が無事なものもあれば、惨禍に巻き込まれたものもいた。

主立ったものがそろったところで、兵部が声を張って一同に申し聞かせる。

「見ての通り、佐敷のお城は燃えてしもうた。島津のやつばらは、いつまた襲ってくるかもしれん。そこで、ワシはこの船でもう一度琉球に戻ろう

と思う」

兵部の言葉に、水夫どもは顔を見合わせる。

「いつまでも逆賊たちの天下が続くとは思えん。やがて天朝様の御代が始まれば、その時こそ、皆打ち揃ってこの佐敷に戻ろうではないか」

水夫たちは何事か話しあっていたが、やがて水夫頭が前に出ると「おどんらもう帰る場所もなか。秋月様に付き従うしか生きる道はなかとお」と告げた。

「よし。では準備ができたら出帆だ」

島津の襲撃を恐れ、早々に港を離れた船は、夕闇迫る島原の島々を右手に見ながら、大海原へと乗り出した。

「もともと私は佐敷殿に拾われた身。こうなったら、いつそ琉球で暮らすかな」

そうつぶやいた兵部は、甲板で海を見ているサハチの様子がおかしいことに気づいた。

ずいぶんと長いこと口をきいていないのだ。

「どうしました、サハチ殿？」

サハチが兵部に目を合わせずに答える。

「琉球では、合戦といっても、あのようなむごい殺し合いにはなりません。命をとられるのは、せいぜい按司とその一族だけ。なのに、佐敷村では、罪もない村の人が大勢殺されていました。母様に抱かれた乳飲み子まで……」
押さえていた感情が溢れ出し、サハチの瞳から大粒の涙がいくつもこぼれる。

「確かに大和の戦（いくさ）はむごいものです。規模が大きいだけに、命を失うものも多数です。なかでも島津は容赦ない戦をします」

兵部は暗い海面を見ている。

「島津……」

「勇猛、と言えば聞こえはいいのですが、とにかく島津兵は命を惜しみません。死にもぐるいで戦います。卑怯と言われることを嫌うのです。そ

のため、島津と戦うと、どうしても生きるか死ぬか、という戦（いくさ）になります」

「勇猛？ 女や子供を殺すのが勇猛なのですか？」

「島津であっても、名のある武将であれば、村人に手出しなどしません。あれは雑兵か、近隣にひそむ悪党のしわざかと」

「悪党？」

「徒党を組んだ野ぶせりどもですよ。いずれにせよ、やがて島津は琉球にやってくるでしょう。島津がこなくとも、大友や大内など、琉球を欲しがるものは大勢います。なにしろ、琉球は宝の島と思われているのですから」
「どうしたら琉球を守れるのでしょうか？」

サハチはもう泣いてはいなかった。

「私には、難しすぎる問いですな」

兵部は言って目を伏せた。

海は次第に暗さを増していった。

その夜、投錨できそうな入り江を探して、帆をしぼった船は、八代海の名もなき島々の中へと静かに分け入っていった。

4

「サハチは変わった」

父親の思詔だけでなく、村人の眼にも、大和から帰ったサハチは大きく変わったように見えた。それまでのサハチは、村人に諍いごとの仲裁を頼まれても、その場にあつた石を投げ、その表裏で物事を決めてしまうなど、いい加減な裁きが多かった。しかし、大和から帰ったサハチは、人々の言い分をよく聞き、問題のうまい落としどころを探るようになった。

争いごとでは、往々にして声の大きな者が有利な裁きをうける。しかし、サハチは老人や年若のもの言葉にもよく耳をかし、公平な裁きを心がけた。

「サハチは、よく話しを聞いてくれる」

佐敷の人々のサハチを見る目が変わって来た。

サハチは暇を見つけては牧港（まちなど）に出向く。港で働く男たちに混じって、沖の大船からおろされる積み荷を眺めたり、華人と筆談し、物の値段や、商いの仕組みを聞き出したりする。

それにしてもーとサハチは思う。牧港から浦添城にかけてのにぎわいはどうだ。

沖合から牧港の目印にもなっている巨大な岩山のふもと、海岸から城までの大通りには石畳が敷き詰められている。その上を、からからと車輪を鳴らし、物資を山積みした馬車や牛車が往来している。道の両側には大きな倉が軒を連ね、市でも立っているのかと思うほど、人が出ている。港から直接城のすぐ下まで荷物を運ぶことができる運河には、大小の荷船（にぶね）が上り下りしている。

サハチはこの町を歩くのが好きだった。察度王治める貿易王国中山の勢いと、その明るい未来を、肌で感じることができるからだ。

夜になると、サハチは佐敷村に戻り、若者たちを集めて、戦（いくさ）の訓練を行うようになった。

朝夕の涼しい時間は、みな畑仕事に忙しい。昼間は暑すぎて何もできない。夕食のあと、月明かりの下で汗を流すことにしたのだ。

武術指導には、琉球に腰を据えた秋月兵部があたった。兵部は若者たちに菊池槍を持たせた。六尺（一八〇センチ）の竹の先に鋭利な短刀を取り付けた菊池槍は、その後の槍の原型といわれる。佐敷氏の後ろ盾であった、天皇方の菊池氏が考案した、当時の最新兵器である。

「この槍を使えば、敵方に踏み込まれることはまずない。狙いはすねだ。低く構えて相手のすねをはらう。そうすれば、相手は立ち上がる事ができなくなる。それで十分」

兵部の実戦的な教えに、若者たちの訓練に

も熱が入る。

「それに、槍がこれだけ長ければ、戦に慣れないへっぴり腰でもなんとかなるんだ」

兵部はサハチに小声でそう告げた。

サハチのすぐ下の弟、サジルーも、熱心に武術を学んでいる。サジルーは兄サハチに、肥後佐敷での戦（いくさ）の話しを、毎晩のように聞かされていたからだ。

その夜も、仲間とともに武術の訓練に精を出したサハチは、ずいぶんと遅くなってから、兵部とともに家に戻り、庭の井戸で汗を洗い流した。

「毎晩、若い衆を集めて何をしている?」

母屋の縁側に出ていた思詔が、サハチに声をかける。

「戦の稽古です」

「誰と戦うのだ?」

「誰とも。もしものための備えです」

「備え？」

「私は大和で、かの国の戦を見て参りました。容赦のない、それはむごい戦でした。あれ以来、私は怖くてしかたありません。いつ大和侍がせめて来るかと。それであるような稽古を始めたのです」

「ほう。お前は大和侍が怖いのか？」

思詔がすねにとまった蚊を叩く。

「大和侍だけではありません。その昔、海の方こうから大勢の蒙古がせめて来たこともあると兵部どのから聞きました。私はこの島に戦を持ち込む全てのものを恐れるのです」

「なぜ、恐れる？」

「この島に住む人は、みな善良でおとなしい。日照りが続けば、日を恐れ、大風が吹けば風を恐れる。それでもみな寄り添って、なんとか生きています。そんな人々が、大和の侍と戦（いくさ）など、できるはずもありません。みな、ただ逃げ惑い、殺されてゆくでしょう。そう考えると、私は恐ろしく

くてしょうがないのです」

「では、サハチよ。お前を恐れるものがいたら、なんとする？」

「私を恐れる？ どういう意味です」

「恐れるさ。每晚若い衆が大勢集まって、大声を上げて戦（いくさ）の稽古に精を出している。隣の大里按司殿などは、恐ろしくて夜も眠れぬだろうて」

「そ、それは…」

「兵を養うというのは、そう言うことだ。周囲のものはみな警戒し、恐れる。そして、最後はお決まりの合戦騒ぎだ」

「私は、せめて戦い方だけは知っておきたいと思っただけです。もしも、それで誰かを救うことができるなら、と」

「その気持ち、分からんでも無いが、もう少しうまくやれんのか？」

「うまく、とは？」

「大和には、犬追物（いぬおもうもの）というものがあるそうですね？」

思詔が近くで問答を聞いていた兵部に語りかける。

「よくご存知で。広場に放した犬を、弓で射ることを競う試合です。鎌倉の武士どもがよくやる遊びですよ」

「例えば、そういうことであれば、誰も戦の稽古とは思いません。山に野犬が増えて困ると、誰かが苦情を言っておったようだしな」

「わかりました。今後、気をつけます」

サハチは思詔に向かって一礼すると、屋敷の中へと入っていった。

「ふうむ」

思詔は顎に蓄えた髭をしごきながら、庭を眺めている。視線の先には、月明かりに照らされ、あかばなが揺れている。

「もう立派な按司殿ですな」

秋月兵部がぼそりとつぶやいた。

「いはいえ」

思詔は笑みを浮かべつつ、なおもあかばなを見つめていた。

中山王察度の御代四四年（明の洪武二六年。西暦一三九三年）の吉日。

この日、思詔は村の主立った連中を家の広間に集めた。

「今日集まってもらったのは、我が家にとつても、村にとつても、大事なことがあったのこと。忙しい時期だが、悪く思わんでくれ」

村人の前で、思詔は頭を下げる。サハチは広間の一番後ろで、思詔の言葉をぼんやりと聞いていた。

「大事なこと、というのは、佐敷の按司のことじゃ。ワシは今日をもって、息子のサハチに按司の職を譲ろう、と考えておる」

思詔の言葉を聞いて、村人はざわめいた。

サハチは思いもかけぬ父の言葉に、その場で姿勢をただした。

村人の動揺を見て取った思詔は、ひと呼吸置いて、さらに言葉を続ける。「サハチは今年、二十一。決して若すぎることではない。それに、このところずいぶんと思慮深くなり、言葉にも重みが出て来た。これは、親のひいき目だけではないと思う」

思詔の言葉に、村人の動揺は静まり、穏やかな目で思詔とサハチを交互に見ている。

「どうだろう、村の衆。サハチを若按司として認めてもらえるかな？」

村人はそれぞれ顔を見合わせると、静かに頷いた。

「それ、サハチ。村の衆はおぬしが若按司となることを認めてくれたぞ」

村人の一番後ろに控えていたサハチが居住まいを正し、両手を床につくと、深々と頭を垂れた。

思詔はその場に立つと、声を張った。

「佐敷按司のサハチ。これ以降、文書（もんじょ）には尚巴志とその名を署することとせよ！」

「かりゆしや！」

「かりゆしや！」

村人に声をかけられた尚巴志が、ゆっくりと顔をあげた。庭の隅からその様子を見ていた秋月兵部は思わず「ほう」と声をあげた。

尚巴志の瞳には、覚悟をした者だけが持つ、強さと厳しき、そして静けさが現れていた。

（了）